

Title	シェア居住する高齢者の意思決定：入居と家族の援助に関する語りから
Sub Title	
Author	近兼, 路子(Chikakane, Michiko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2017
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.22 (2017. 7) ,p.169- 170
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大会報告要旨
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20170701-0169">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20170701-0169</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

---

## シェア居住する高齢者の意思決定

### —入居と家族の援助に関する語りから—

近兼 路子

---

一人暮らしの高齢者の増加が社会問題化している。内閣府（2015）の意識調査では、多くの一人暮らしの高齢者は健康や病気（58.9%）、介護が必要な状態になること（42.6%）が不安と回答している（複数回答）。一方、軽度の支援が必要になった時でも、大半は現在の自宅での生活（66.6%）を望んでいる。ケア付き住宅や施設での生活は25.3%、家族・親族の家での生活は5.5%と少ない。近年、家族以外の他者と暮らすシェア居住が注目されているが、上記調査ではこうした住まい方に対する一人暮らしの高齢者の意識は不明である。日本には同居する相手は家族であるべきとの家族規範があるとされており（久保田 2009）、シェア居住はその規範から逸脱するものである。

一人暮らしの高齢者がシェア居住とこの規範をどうとらえているかを知ることが本研究の目的である。その手がかりとして、グループリビング（以下、GLと表記する）に転居した高齢者の入居の意思決定と家族との関わりについて検討する。GLは「自立と共生」を理念や目標に高齢者10人程度が暮らすシェア居住の一形態である。「自立」とは「必要な依存をすること」により自立的な生活をする（大江 2005）、自分で決定しその責任を自らが負うという意味である。「共生」とは助け合いの心であり、地域社会との共生も視野に入れている（NPOCOCO 湘南）。

家族と意思決定について、山田昌弘（2004）は「家族の枠内での個人化」概念を用い、相談（交渉）において勢力が弱い家族成員が不本意な選択を強いられる可能性があり、それに対抗するには外部勢力の介入に頼るか家族関係を解消するしかないと指摘する。また、坂本佳鶴恵（1990a; 1990b）は「長男責任規範」を提示し、交渉関係者の齟齬を調整し決定に責任を持つ家族成員が存在するという。いずれも、個人の選択は家族内の権力関係に拘束されるとみている。一般に、援助を受ける側の高齢者の立場は相対的に弱いと考えられる。分析にあたっては家族の援助と権力関係が意思決定に与える影響に注目する。

分析対象は、2013年2月から16年1月までに聞き取り調査を行ったGLの居住者10人（男性5人、女性5人）である。彼らの語りから、家族・親族と入居決定および援助に関する部分を抽出する。

入居プロセスは、①意思決定後に家族に報告（Aさん、Bさん、Cさん、Dさん、Eさん）、②自ら提案し家族との協議を経て決定（Gさん、Iさん）、③家族から提案され協議を経て決定（Fさん、Hさん、Jさん）の三つに分類できる。いずれのプロセスでも家族への配慮が語られた。Fさんは、自らの家庭をつくり仲良くしている息子の家に自分が入ると、どちらかが「いびつに」なるのではないかと語った。またBさんは、GLへの入居によって一人娘の将来の介

護負担を軽減させたいという一方、家族に「看てもらおう方もつらい思い」になるという。入居は「自分と家族にとって有益」との語りは G さん、H さん、I さんからも聞かれた。

F さん、G さん、J さんの語りからは「家族の意見の一致」を重視していることがわかる。J さんは娘夫婦が決めてくれた GL について、はじめ気が進まなかったが、軍隊経験など団体生活の経験があることから「ここと決めて入った」という。自らも決定に参加したとの意識がうかがえる。また、家族の援助に関する社会的批判を避けようとする語りもある。A さんは「子どもとしては、こういうところによこしたっていうのが引け目あるでしょう」が、「どこも今、こういうの建ってるからね、親の自立、みんなしてるからいいんだけど」という。

10 人の事例から、高齢者は入居の意思決定において、援助をめぐる「家族成員にとっての有益性」「意見の一致」「社会的批判の回避」に気を配り、家族との関係を調整していることが確認された。暮らしの選択は家族内の権力関係に左右されるというよりも、高齢者が自身と家族成員の援助負担の軽減のため主体的にかかわる形で意思決定されていた。家族規範（同居）からの逸脱を黙認（Merton 1957=1961）することで、家族とのつながりを保ちながら不安を解消できる住まいとして GL が選択されていたのである。

#### 【文献】

- 久保田裕之, 2009, 「若者の自立／自律と共同性の創造: シェアハウジング」牟田和恵編『家族を超える社会学: 新たな生の基盤を求めて』新曜社, 104-36.
- Merton, Robert K., 1957, *Social Theory and Social Structure: toward the Condition of Theory and Research*, revised ed., Glencoe, The Free Press. = 1961, 森好夫訳『社会理論と社会構造』みすず書房.
- 内閣府, 2015, 「平成 26 年度 一人暮らし高齢者に関する意識調査」(2016 年 6 月 26 日取得, <http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h26/kenkyu/zentai/index.html>)
- NPO COCO 湘南, 「高齢者の自立と共生」(2016 年 5 月 31 日取得, <http://www.coco-shonan.jp/index2.htm>).
- 大江守之, 2005, 「高齢者グループリビングの可能性と課題」『都市問題研究』658: 31-42.
- 坂本佳鶴恵, 1990a, 「長男扶養に関わる 2 つの規範: 『家』意識の意味」『社会老年学』32: 74-82.
- , 1990b, 「扶養規範の構造分析: 高齢者扶養意識の現在」『家族社会学研究』2: 57-69.
- 山田昌弘, 2004, 「家族の個人化」『社会学評論』54(4): 341-54.

(ちかかね みちこ 慶應義塾大学大学院社会学研究科)